

紀 要

第 1 号

目 次

『紀要』の創刊にあたって

1. 琵琶湖湖底遺跡の調査の現状……………(濱 修)
 2. 近江の地域色の再検討
—弥生時代後期～古墳時代初頭における高坏形土器・器台形土器の実態—
……………(小竹森直子)
 3. 古式土師器研究ノート(1)……………(森 格也)
 4. 竪穴住居に付随するカマドの検討—滋賀県下の検出例から—……………(宮崎幹也)
 5. 衣川廃寺の再検討……………(細川修平)
 6. 穴太廃寺の建立と再建の年代をめぐって
—穴太廃寺のもつ問題点からのアプローチ—……………(仲川 靖)
 7. 中世土師器皿と生産地……………(横田洋三)
 8. 近江における瓦質土器について……………(奈良俊哉)
 9. 浮世絵にあらわれた煎茶茶碗……………(稲垣正宏)
 10. 魚獲りって難しい—抄網の機能と形態—……………(大沼芳幸)
-
-

1988. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

10. 魚獲りって難しい

——抄網の機能と形態——

大 沼 芳 幸

1. はじめに

ふと水面を見た時、魚が楽しそうに泳いでいる。自然の美しさを愛でる前に、「獲ってやろう。」「食ってやろう。」という衝動に捕われたことはないだろうか。私はこの衝動に身をまかせ今まで数々の殺生を重ねて来た。これは私に仏性が無いからではなく、私の心に巢食う遠い祖先達の血がそうさせるのである。

祖先達⁽¹⁾が魚を食おうとした時、どうやってそれを得たであろうか。一番簡単な漁獲の方法は「手づかみ」である。「手づかみ」でも確かに魚は獲れる。しかし相当の技術と良好な環境が必要である⁽²⁾。半分つかまえた魚がツルリと逃げてしまった時、穴の中のスッポンにかまれたりギギに刺されたりした時、雨の日、寒さに震えながら魚を追った時、祖先達は「もっと手が大きければ。」「もっと安全に魚が獲れたら。」「もっと効率よく魚を獲りたい。」と切実に念じたに違いない。この楽をしたいという向上心が「網」という偉大な発明を人類にもたらした。

現在多様な網⁽³⁾による漁獲が世界中の水域で行われている。この網の中に抄網と称される一群の漁具がある。埋蔵文化財の調査で出土する木製漁具の中にはこの抄網に分類されるものが多く含まれている。

抄網とは、木・竹・金属等により網の周囲を支持し、底を袋状にした網で、網類の中では最も簡単な構造を持ったものであり⁽⁴⁾⁽⁵⁾、タモ網とサデ網の二種類がある。タモ網は丸い枠を持つもの、サデ網はそうでないものといった分類もあるが⁽⁶⁾、実際には相互に明確な違いが見出し難いためここでは両者を区分しないことにした。

2. 抄網の形態

抄網にはおおよそ5基本型があり、それからいろいろの形態に分化している。(第1図)

基本型A

枠の部分を一材で造るもので、補強材を入れる、柄を着けるといった変化が見られる。

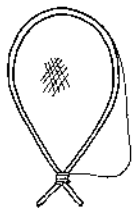
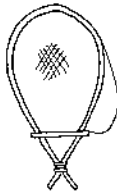

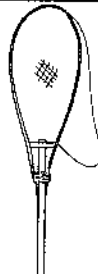
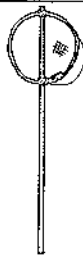

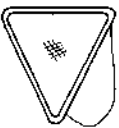
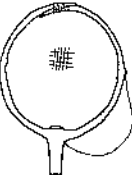

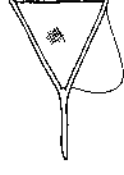
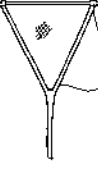

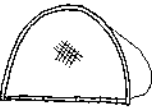

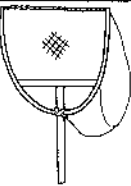
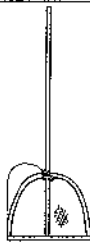
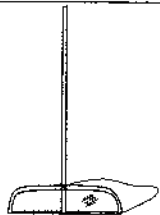

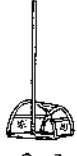
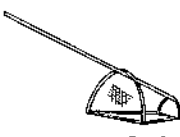


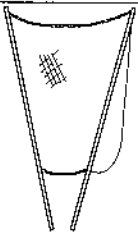
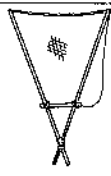

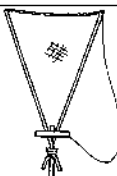
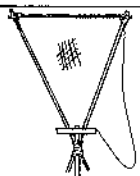
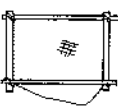
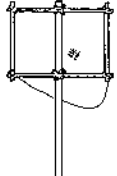
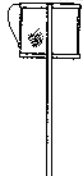
基本型B

柄を含めた本体の大部分を一材で造るもので、枠の部分が円形のものや三角形のものがある。

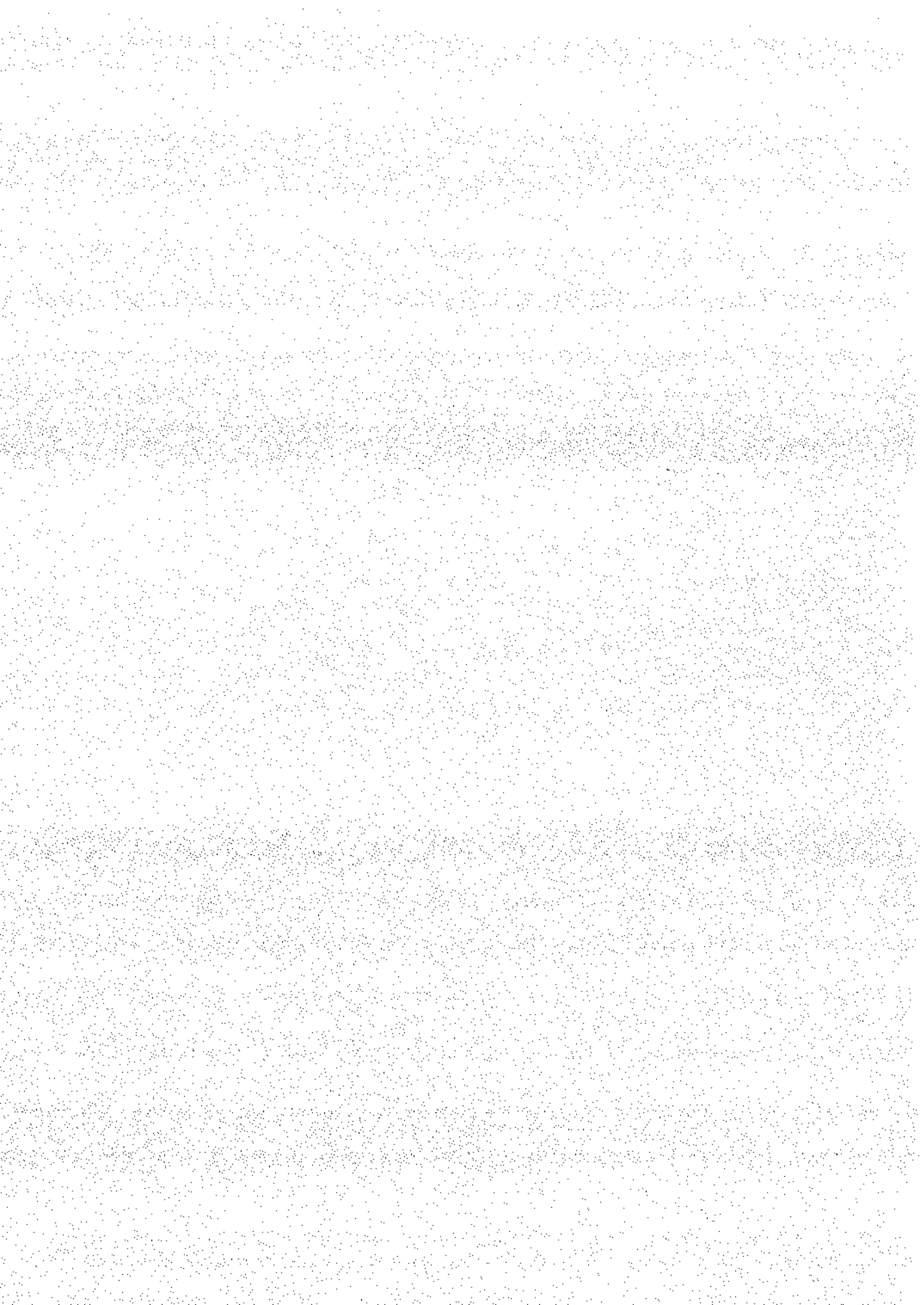
またこの基本型に別柄を装着する場合もある。

基本型C

一材をU字形に曲げ網を着けたもので、補強材を着ける、柄を着けるといった変化の他に、網

	基本型	バリエーション					
A	 A-0	 A-1	 A-2	 A-3	 A-4	 A-5	 A-6
B	 B-0	 B-1	 B-2	 B-3			
C	 C-0	 C-1	 C-2	 C-3	 C-4	 C-5	
		 C-6	 C-7	 C-8	 C-9		
D	 D-0	 D-1	 D-2	 D-3	 D-4	 D-5	
E	 E-0	 E-1	 E-2				

第1図 抄網の形態



ところが同じオイサデ漁でも全く異なる型式の抄い網を用いる漁法がある。安曇川町を流れる鴨川の下流部で行われている川を遡るアユを獲るための漁法で、主漁具としてA・3型式のサデアミを、副漁具として湖岸のオイサデ漁で用いるのと同じウザオを用いる。

漁の方法はまず、川に架かった橋のすぐ下手の川底に砂で人工の土手を造り、流れを二本に分流させる。川を遡って来たアユをウザオで片方の流れに追い込んだ後、橋の上に並んだ漁師達がそれぞれアユが川を横切るように追う。すかさず別の漁師が今度はもう一方の流れを下らすように追い、この流れに仕掛けたサデアミの中に追い込むものである。川の両側と橋の上に並んだ黒眼鏡の人相の悪い漁師達が、次々と水面を掃くようにウザオを動かす様は何かしらユーモラスである。(第3図)

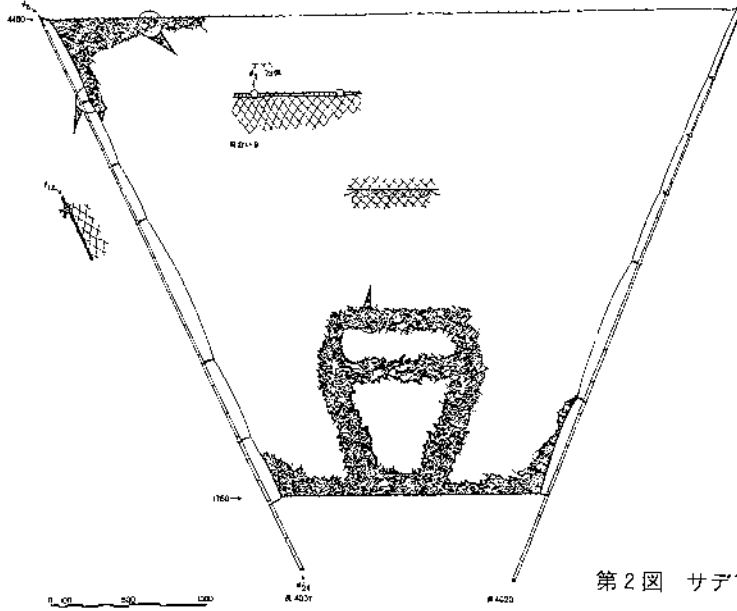
さて、これら二つの漁法では抄網は主漁具として用いられている。しかし志賀町和邇川で行われていたヤナ漁では鴨川と同型式のサデアミがウザオと共に副漁具として用いられていた。和邇川のヤナは小規模なもので、カトリヤナやチリトリヤナのような漁獲施設を持たないことが特徴である。ヤナは、図-4に示したように二ヶ所の簀によって構成され、表簀の下を通った魚が裏簀に遮られ簀の間を行ったり来たりしているところをウザオとサデ網もしくは小型の四ツ手網で一網打尽にする趣向である⁽¹⁰⁾。

今仮に湖岸のオイサデ漁をA、鴨川のオイサデ漁をB、和邇川のヤナ漁をCとしよう。AとBは主漁具である点で共通するが用いられる漁具の形態が異なる。BとCは用いる漁具の形態は基本的に共通するが、主漁具と副漁具の相違がある。A・B・Cは共にウザオを用い魚を追うという共通点を持つ。これらの関係を個々の漁具と漁場環境とのかかわりから考えてみたい。この場合の漁場環境とは漁獲対象魚およびその性質をも含めたものと考えていただきたい。

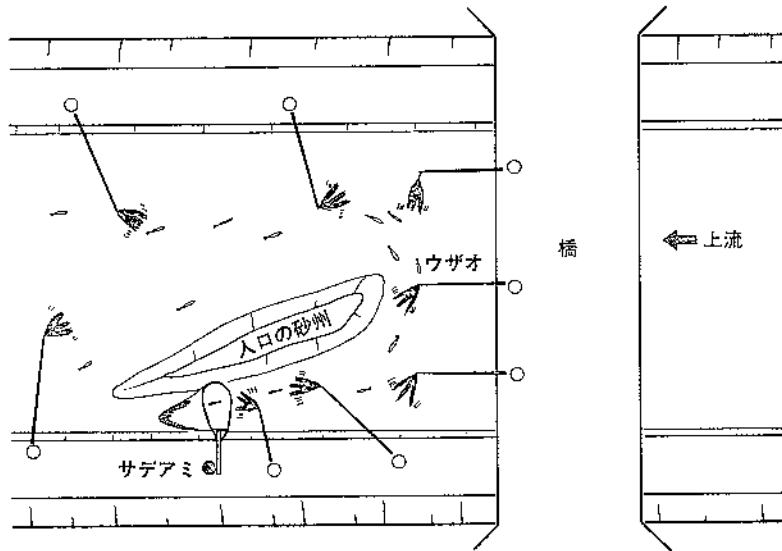
Aの場合(第2図)、漁場は湖岸である。すなわち流れはない。湖底の状況は細かな砂礫質である。魚は湖岸に対して平行に追われるが、逃亡可能な水域はほぼ無限にある。それに対し漁師が網を操作出来るのはせいぜい水深が腰のあたりまでという限定された水域である。このような環境を考え合わすと始めてAにおけるサデ網の合理性がわかる。

まず流れがないから網全体を強固な枠で支える必要がない。そのため網の上端部は小さなシズ(沈子)を着けた紐で構成することが可能になり、網の端部を効率よく湖底に密着出来るようになった。アユという魚は実にすばしっこい。逃げる時は決して浮き上がっては泳がない。水底スレスレに、しかも石と石の間を縫うように泳ぐ。この性質故アユを獲るためにはまず漁具と水底を密着させることが基本である。私はかつて友釣りの圏鮎を獲るため未明の川に海パン一枚で入り1時間以上も投網を打ち続け、一匹も獲れなかったことがある。鮎は沢山おり一応網に入るのだが、沈子と岩の間からすべて逃亡してしまうのである。あの寒さとかやしきは今だに忘れられない。閑話休題

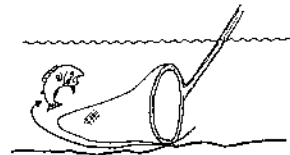
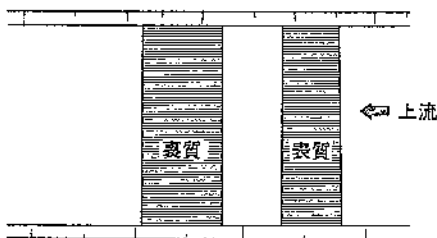
この構造は同時に漁具の軽量化と優れた操作性をももたらしている。すなわち両手を広げた形で網を操作することにより力の配分の効率がよく、網自体の軽量化と相俟ってより大型の網の使用を可能にした。敵にとって逃亡可能な水域が無限に等しい湖の漁で、漁具の大型



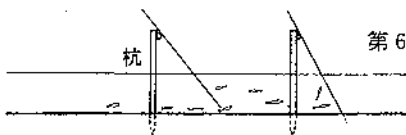
第2図 サデアミ



第3図 鴨川にみられる違いサデアミ



第6図 弾力のない網枠の場合、アユはたやすく逃げる



第4図 和邇川のヤナ模式図

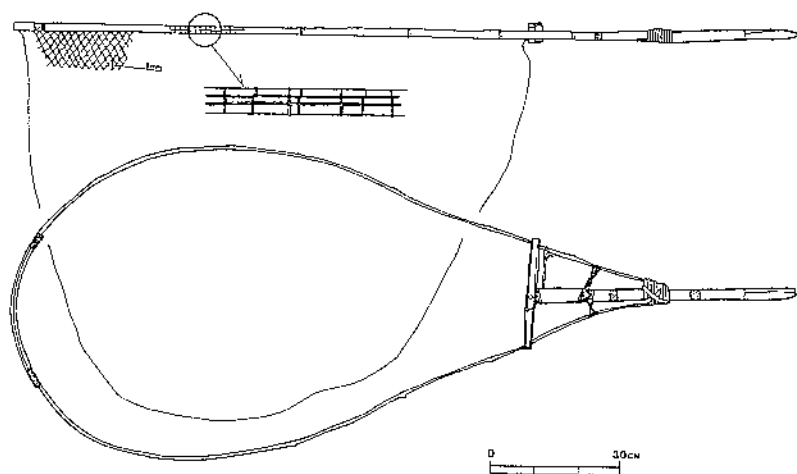
化は漁獲量の増加に連なる。このようにAにおけるD-1型式の採用には漁場環境と融合した見事な合理性が窺われる。

Bの場合、第5図、漁の行われている鴨川の下流部の川幅は15m程しかなく、無限に近い広がりを持つ本湖に比べればきわめて狭い水域である。さらに湖では見られない水流が存在する。湖岸のオイサデ漁が岸近くに群泳するアユを獲るのに対し、鴨川のオイサデ漁は川を遡るアユを獲ること等環境面で大きな相違が見られる。しかし水底の質に関しては両者共砂礫質で共通している。このような漁場環境は漁具に対してどのような影響を与えるだろうか。

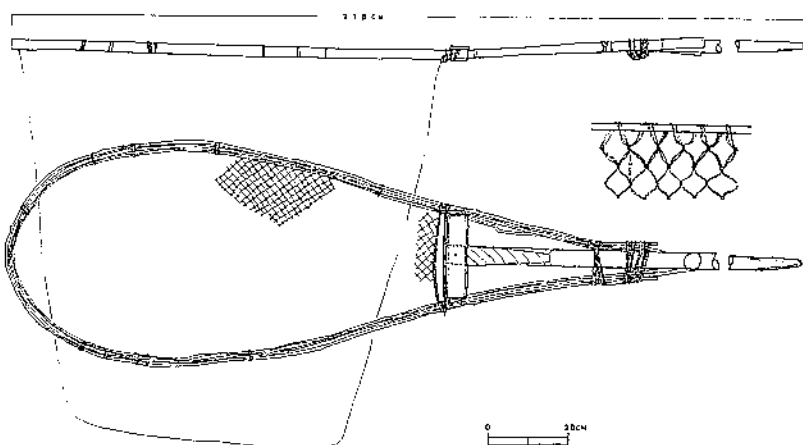
まず水流の影響について考えてみたい。ほとんどの抄網は止水もしくは水流を受ける形で使用される。網が袋状に広がらなければ魚は入らない。水流に逆らって網を使っても袋の外側から魚を入れるようなもので、魚が獲れるはずがないからである。しかし敵は川を遡って来るわけであるから問題である。鴨川の場合この矛盾を敵を無理矢理Uターンさせることで見事に解決した。すなわち第3図に示したように、本能のまま水流に逆らって遡って来た敵を攻撃側が片方に寄せた後、水流に乗せて網の中に追い込むわけである。この場合敵が遡って来る部分は広い方が敵にあやしまれない。となると川幅は限られているから必然的に漁獲部は狭くなる。このことは同時に敵を狭い所に集めることにも連なるから非常に効率のよい攻撃を可能にしている。それでは何故D-1型式の網を用いなかったのだろうか。この漁で気付くのは、漁師のいずれもが陸にいることである。狭い水域での漁で人間が水の中で行動することはすなわち敵に危険をさとらせることに他ならない。D-1型式の網は操作者が水の中で魚の入るのを待つ型式である。さらに敵は絶え間なく遡って来るわけではない。不定期的に小さな群を作って遡って来るのである。Aの場合、漁師は魚を求めて移動することが出来るが、Bの場合漁師の移動は不可能である。とすれば、いつ来るかわからない敵に備えて網の操作者は一日中水の中で待機していなければならないことになる。これでは身がもたない。また漁獲部が狭いため大型の漁具は不適當でもある。このような条件のもとで採用された漁具が第5図に示したA-3型式の抄網である。それではこの網の構造は漁場環境とどのように関わっているのだろうか。

まず目につくのは、網枠がマダケの割竹2枚を継いで構成されていることである。一見して単純とも受けとれるこの構造は耐久性を無視したようにも見える。しかしAでも触れたアユの性質を考え合すると、この構造は納得出来る。すなわち枠が一枚の薄い割竹で造られているということは、脆弱ではあるが大きな弾力を持つということを意味しており、柄で押さえることにより、川底に枠を密着させることを可能にしているのである。弾力に乏しい材を使った抄網だったらどうであろうか。枠が固いから底に接する面が少ない。ということは敵に逃げ道を沢山与えていることになる⁽¹⁾。(第6図) 事実、竹は古くなると弾力を失うため、枠の部分は毎年造り換えるということである。

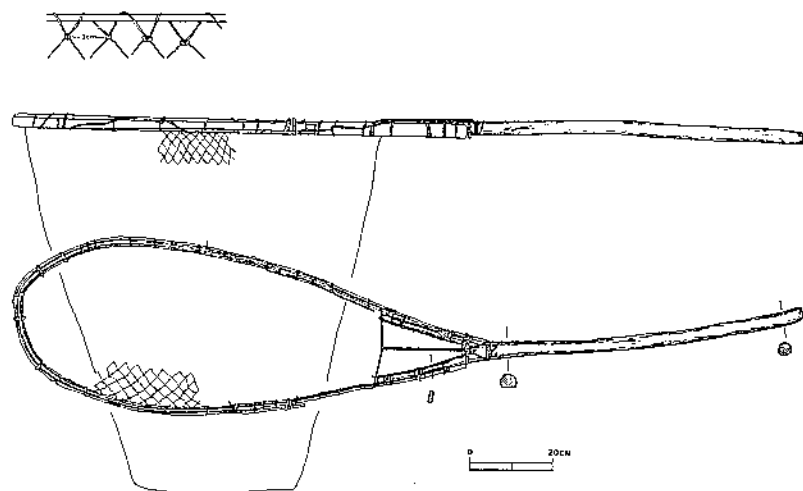
網枠に網地を着ける際、通常は一旦、棒材もしくは紐で内枠を造り網を通した後、内枠を外枠にかがって止める。このかがり方は普通第9図のように1本の紐で連続して止めて行く。しかしこの網の場合1目ごとに結び着けて固定した後さらにその上から細い銅線がかがり止



第5図 鴨川で用いられるサデアミ A-3型式



第7図 和邇川のヤナで用いられるサデアミ (アユ用) A-3型式



第8図 和邇川のヤナで用いられるサデアミ (ハス用) A-2型式

めている。この止め方は枠と川底のスレに対する深い配慮からなされている。漁に際して網枠は砂礫質の川底に強く押し付けられ、引きずられる。これが日に何回も、そして毎日繰り返されるわけであるから、内枠を固定する紐はすぐに切れてしまう。もし1本の紐で連続的にかがり止めてあったら1ヶ所のほつれは伝線し大穴があいてしまうことになる。これを面倒でも1回1回結びながら固定したものは、たとえ1ヶ所がほつれても他に伝線することはない。さらにその上から銅線で固定するわけであるから穴の広がることはまずないと考えられる。このようにBにおける網は川底に対する弾力と摩擦に対し最も配慮し造られた漁具であると言える。このようにBにおいても漁場環境に応じた漁法と漁具が考案されていることがよくわかる。

Cの場合、第7・8図 先にも触れたようにこの場合は副漁具としての抄網である。魚を獲る原理はA・Bと共通するが、漁場はヤナという主漁具の漁獲部という閉鎖された特殊な環境にある。また漁獲の対象となる魚にとってこの閉鎖水域から逃亡するのは不可能である。

ここで用いられるサデ網二種を見てみよう。第7図はアユ用、第8図はハス用である。一見して気付くのは、Bの網に比べて網全長に対する網枠部の大きさが小さいこと、また網枠の構造が非常に強固であること。枠の強固さに比べて網地を着けた内枠と外枠の固定法がやや雑であること等がある。これらの構造的な特色は漁場が閉鎖された水域という特殊環境に起因すると思われる。自然状態に比べたら異常に高密度に集中したかつ逃げ道のない魚を獲えるわけであるから事は簡単である。ことさら漁具に負担をかける操作をする必要もないわけであるから、枠は長持ちするように造ればよい。このため枠の形をBに比べてより細長く造り、川底に力を込めて押し付けなくとも密着する辺が長くなるようにしている。さらに枠と底との摩擦も小さいわけであるから内枠の固定法も簡単でよいということになる。

同じヤナで用いる網であるが、対象となる魚によって形態がやや異なる。アユ用の網がA-3型式であるのに対してハス用の網はA-2型式である。魚の大きさに応じて網の目合を変えるのは当然のことであるが、枠の形態まで変える必要があるのだろうか。確かにアユ用の網でもハスは獲れる。ただし、ハスという勢いきの強い魚を獲るのにアユ用の網地は弱すぎ、すぐに破損する恐れがある。これではかえって効率が悪いので魚種別に網を誂えることになる。この際、より合理的に魚を獲えるためには魚の性質に応じた構造をとればよい。

アユの性質については何度も触れた。ここでハスの性質について少し触れてみたい。ハスは琵琶湖淀川水系および三方五湖のみに棲息するコイ科唯一の魚食魚である。晩春から初夏にかけて岸に近づき、やがて群をなして川を遡り、やや流れの穏やかな所で産卵する。ハスは遊泳力抜群の魚で、大きな口をいっぱいに広げアユ等の小魚を追い廻して食べる。泳ぐ時はアユとは異なり水の中層から上層を泳ぐ。特に驚いて逃げる時にはジャンプしながら泳ぐことがよくある。ヤナ漁の対象となるのは産卵のために遡るハスである。ハスを獲るにはアユの場合とは異なり、網を底に押し付ける必要はない。追われたハスはやみくもに網の中に飛び込んで来るからである。そうするとハスの網はアユのそれに比して、枠の強度はそれ程重視しなくてもよいことになる。ここでもう一度2つの網を見てみよう。両者とも同じ漁場

で用いるためプロポーションは似ている。しかしアユの網が枠と柄の間に補強材を用いるのに対し、ハスの網は叉状の自然木を利用しているだけで、強度的には前者に劣る。とは云え、ハスを獲る分には十分な強度と機能を持っていると言える。

このようにCの場合は、同じ環境のもとでも対象魚に応じて漁具の形態が異なることを示している。

A・B・C 3つのよく似た漁法の観察を通してうかがえるのは、まず主漁具の形態・機能は環境により規制されること。また副漁具のそれは、漁場環境に加えて主漁具の機能・形態に規制されるということである。それでは他の漁法ではどうであろうか。

② ミスクイ網、(第9・10・11図)⁽¹²⁾

この3点の網は、いずれも高島町で見聞したミスクイと呼ばれる漁に用いる抄網である。

ミスクイとは主に冬期、活動ののぶった魚が藻の下や舟の下等に群れているのを岸から抄い獲る漁法で、専業漁業者が行なう漁ではなく、水辺に暮らす人々が半分はタンパク質を得るため、半分は遊びで行った漁である⁽¹³⁾。この3点のミスクイ網は、近接した集落でそれぞれ用いられていたもので、漁場環境の差異は認められないが、その構造は大きく異なる。

第9図の網は自然木を利用したC-4型式に属する。第10図の網はD-5型式に属する。第11図の網はA-3型式の変形型に属する。枠部分の形態はそれぞれ異なるが、柄と枠の接続部分はいずれも強靱に造られる。また、地面との摩擦や、藻等の重量物が網の中に入るため、外枠と内枠が念入りに固定されていることその他に、最も大きな共通点として長い柄を持つということがあげられる。

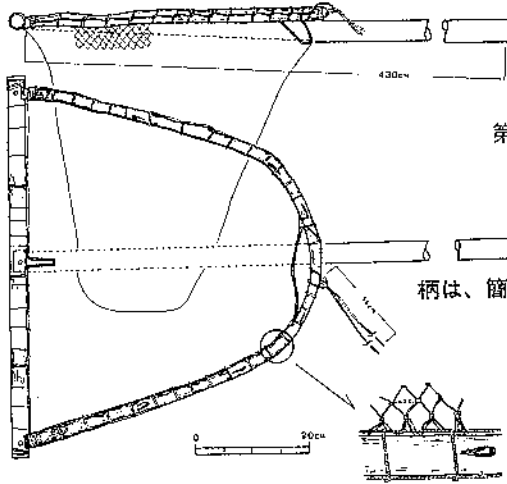
冬期、岸から離れた物陰に群れる魚を獲るという目的に対し、最も留意しなければならない条件は、身体を濡さず行動出来るということである。いかに動きがのぶなくなっているとは言え野生の動物である。水の中にバシャバシャと入って行ったのでは驚いて逃げてしまう。獲る側にしても冬に水の中に入るのは自殺行為である。とするならば、離れた獲物を獲るにはどうすればいいか？網自体を投げるか、網に柄を着ければよい。しかし敵は障害物の陰に身を潜めているのであるから投網の類は不適當である。網に長い柄を着けるのが一番ということになる。そうするとミスクイに用いる網は長い柄を持ち、藻等の重量物が入っても大丈夫な強度さえあれば網枠の型式はどうでもよいということになる。極論するならば、どんな形の枠でも長い柄さえ着ければこの漁の真似事は出来るということである。

この漁具の観察から読み取れることは、基本的な漁具の形態を規制するのは漁場環境とそれに適合した漁法である。漁具の細部を規制する要件は、材料の入手、操作者の体格、技能、製作者の技能等多岐にわたるが、基本的な形態さえ備えていれば、機能上の差異はなく、漁具細部における個々の違いは、何ら問題ないということである。

次に副漁具としての抄網を見てみよう。

5. 副漁具としての抄網

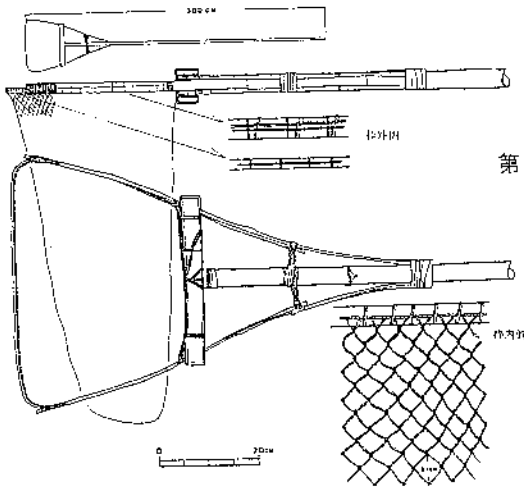
イ. ツボと抄網



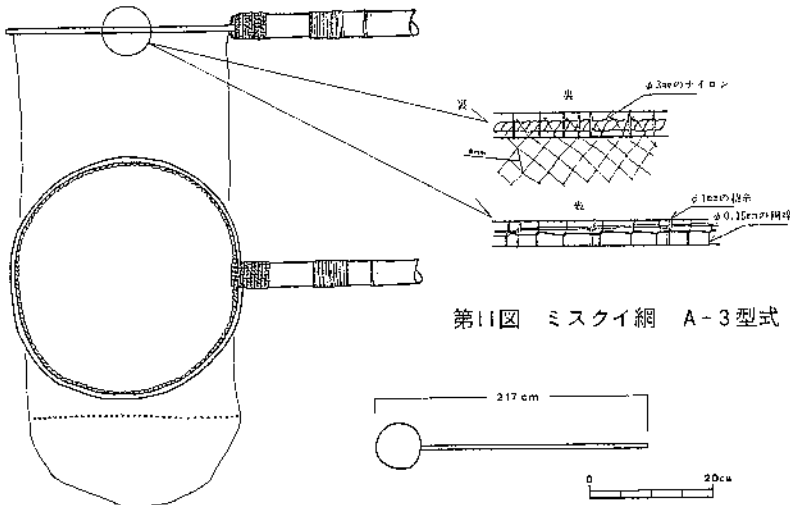
第9図 ミスクイ網 C-4型式

柄は、簡単に着脱できる。

網地は紐の内枠に通した後、1本の紐で
かがり止める。



第10図 ミスクイ網 D-5型式



第11図 ミスクイ網 A-3型式 (変型)

琵琶湖には日本淡水漁の約 $\frac{1}{3}$ にあたる50種以上の魚が棲息している。このタンパク質を得るため人々は多くの漁法を考え出し腹を満してきた。これらの漁法の中に「ツボ」と呼ばれる漁獲施設を使うものがある。ここではこの中でも琵琶湖を代表するエリ漁と、ヨシマキ漁におけるツボとその副漁具である抄網の形態について触れてみたい。

イ. エリ漁—エリは多言を要するまでもない琵琶湖独特の定置漁法で、フナ、コイを獲る粗目のエリ、コアユ、エビ等を獲る細目のエリがある。その他に小河川や内湖等に設置する定形のエリもある。形はどうあれエリは廻遊または川を遡る魚が障壁添いに泳ぐうちに知らぬまに「ツボ」の中に入り込みそこから出られなくなるという共通の漁獲原理を持っており、第12図に示したような基本的な構造を持つ。

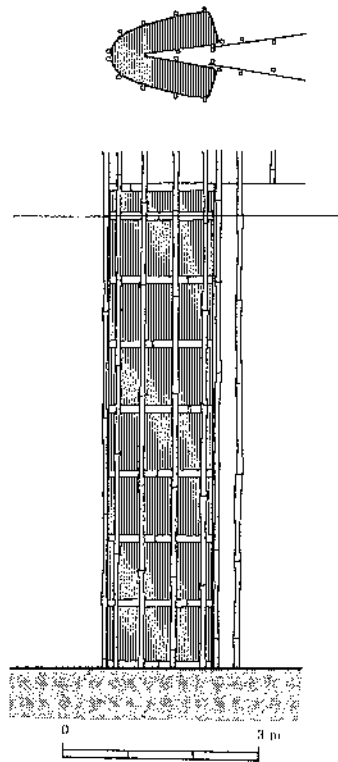
エリの規模は湖底の地形に規制される。すなわち、エリを構成する簀と杭の長さに限りがあから、それ以上の深さの所には造れないということである。簀エリの場合、ツボの深さ10m前後が限界であるという。湖西中部の場合、湖底が急に落ち込むため、ツボの深さは限界ぎりぎりのところにもって行くことが多いが、それでも沖出しが短くなっている。それに対し南湖地方の場合、水深は一樣に浅いため長大な沖出しを持つことが可能である。それでも草津市北山田の場合、ツボの深さは4.5mと湖西地方の約半分の深さである。このツボの深さはエリ漁の副漁具である。エリカキダマ（抄網）の柄の長さを規制する。これはツボの中に入った獲物を抄い獲るための漁具であるから少なくともツボの深さ以上の柄の長さが必要である。志賀町今宿で観察したエリカキダマは全長9.05mにおよぶ長大な柄を持っていた。第13図 また、枠の形態はツボの形に合わせ長方形に近い形をしている。ツボは底板とそれを垂直に取り巻く簀によって構成されている。三角形や円形の枠ではこの中を効率よく抄えないからである。また外枠と内枠の固定方は、紐でかがって止めるのではなく、枠の側面に小孔を穿け、1ヶ所ずつ針金で結び付けていく。こうすることにより操業時の簀や底板との摩擦による破損を防いでいる。

このように副漁具であるエリカキダマの形態は、主漁具であるエリの構造に大きく規制されている。しかし面白いことにエリの場合、副漁具の機能が主漁具であるエリの一部であるツボの構造を規制している。ツボ以外の部分の簀の張り方は図-14のように杭を交互に打ち、この間に簀をはめていくが、ツボの部分に限り杭は全部簀の外側に打たれる。さらにツボを補強するための竹の輪もすべてツボの外周にはめられる。これらのことはすべてツボの中をエリカキダマで掻き獲る時の障害物を一切外側へ移動させた形態で、副漁具の機能に主漁具の形態を適応させることにより、主漁具の機能を高めているといえる。

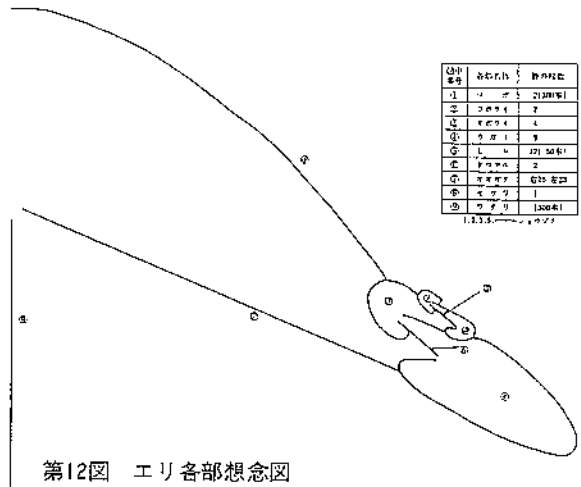
ロ. ヨシマキ漁⁽⁴⁾

かつて琵琶湖は広大なヨシ原におおわれていたという。ヨシ原は魚にとって産卵の場所であると共に、恰好の隠処でもあった。ヨシの中に逃げ込めば鳥は来ないし網も入らない。まさに魚の天国とも言うべき処であった。しかし人間の食欲はこの天国を地獄に変えた。ヨシマキ漁の考案である。

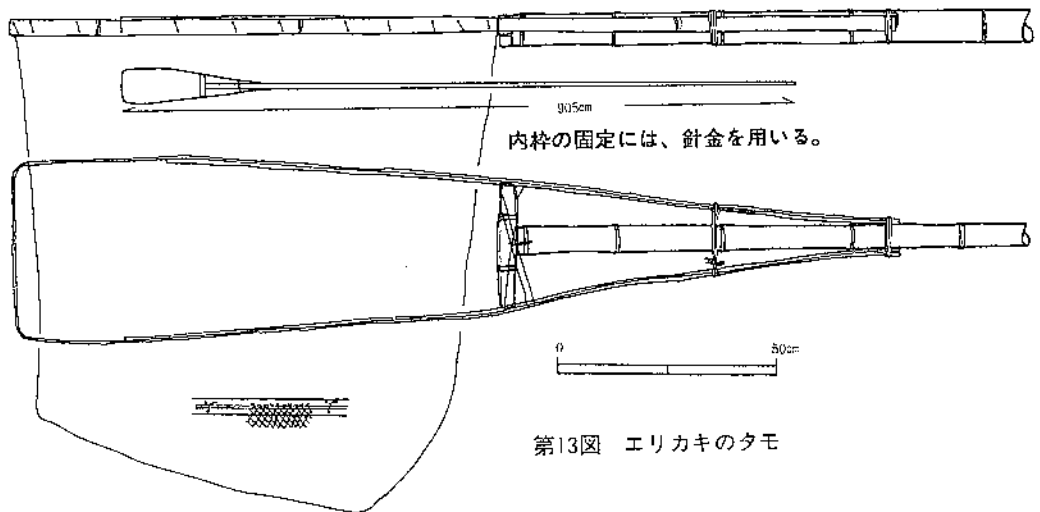
ヨシマキ漁は人間が水の中に入り、魚のいそうなヨシ原を網で囲った後、徐々に網を狭め



第14図 エリのツボ



第12図 エリ各部想念図



第13図 エリカキのタモ

て行き、最後に簀で作ったツボの中に魚を追い込み漁獲する方法である。囲う面積はケースバイケースであるが、最高で9 m程の網25枚程度で囲える範囲である。網の入れ方やせばめ方も漁場の環境によって異なるがおおよその手順は第15図に示したようなもので、その最終段階で第16図のようなツボを造る。このツボの中に追い込んだ魚を獲るための副漁具が第17図のタマである。一見するときわめて単純なこの構造にはどのような意味があるのだろうか。

最も大きな特徴は柄がないということであろう。この構造の意味を知るためにはツボの構造を知る必要がある。ツボは丈140cm、長さ490cmの簀3枚で造る。最終的な漁獲部は簀1枚分の円形であるから、その面積はおおよそ2 m²のきわめて狭いものである。漁獲者はツボの中に入って魚を獲る。⁽¹⁵⁾ わずか2 m²の中に大人が入って動き廻るわけであるから漁具は小型の方が都合がよい。しかし、余り小さなものでは効率が悪い。そこで最も不用な柄を着けるのをやめてしまったのがこの形である。さらに枠の上面に小孔が穿けられこの孔を通して内枠を固定しているのが注目される。これは、枠の外側に内枠固定のための紐が露出した場合、湖底や簀との摩擦により破損する恐れがあるためである。さらに湖底と一番強く当たる先端の部分には、竹の板を当てて補強してある。枠の形が楕円形のプロポーショナルを採用したのは、ツボが曲面で構成されているからである。ツボの壁面に対し垂直に下から上へ掻き上げるように使う時は、枠のカーブとツボのカーブが合致し非常に効率がよい。角型のタモではムラが出来余りよろしくない。

さらに枠の大きさに比して長大な網地が目玉を引く。これは身体が半ば水につかったの作業であるから網が短かければ一度抄った魚が逃げてしまう可能性がある。また、魚を網の中に溜めておくことが出来るから、獲った魚の移し換えの回数が少なくてすむ。この漁においても漁法は漁場環境に、漁具は漁法に規制されていることがわかる。それにも増して一度手に入れた魚は絶対に逃がさないという人間の気迫すら感じられる。

ハ. 釣り漁における抄網

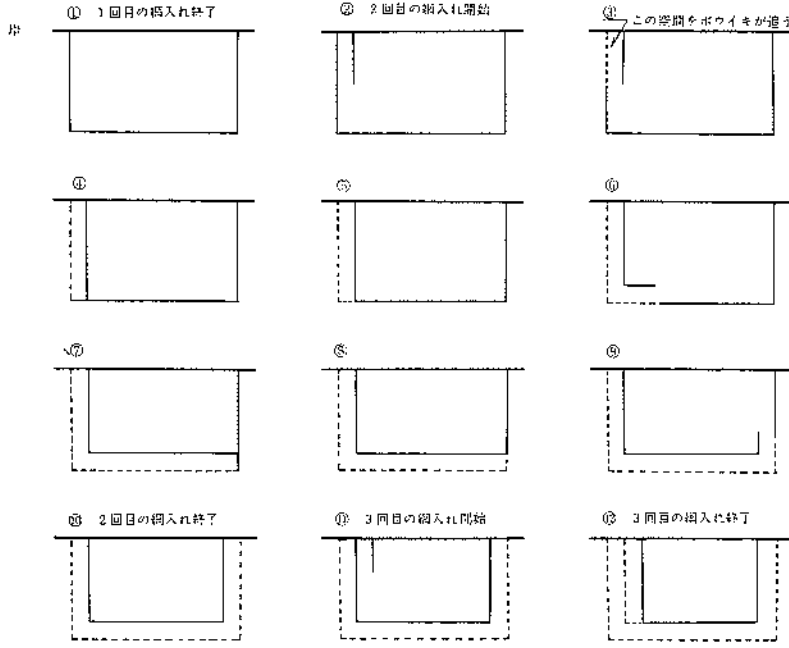
釣魚は網漁と並ぶ主要漁法で、古い歴史を持っていることはよく知られている。現在釣は職業としての釣りと遊漁としての釣りに分化している。ここではやや視点を変え遊漁としての釣りにおける抄網について考えてみたい。

a. ヘラブナ釣りの場合

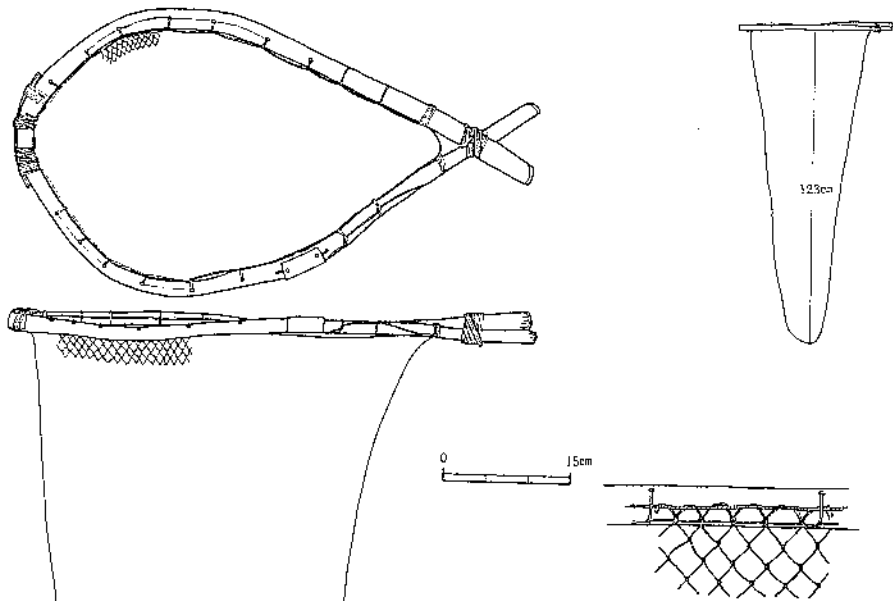
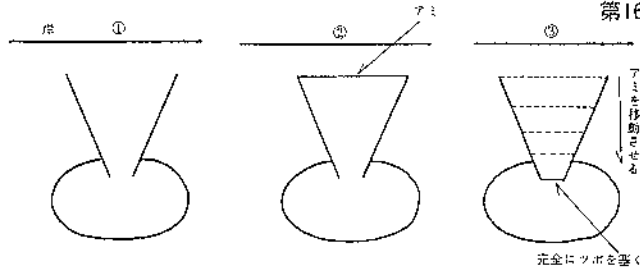
ヘラブナとは琵琶湖原産のゲンゴロブナから食用に改良されたフナである。食性は主に植物質で、水の中、表層を群れをなして泳ぐ。かつて網では獲れるが絶対に釣れないフナがあり、当時の釣人は血眼になってこのフナを釣り上げようとしたという。これがヘラブナである。ヘラブナは主に植物性プランクトンを食するため、マブナのように生餌では釣れない。練り餌という特殊な餌が考案され始めて釣りの対象となった。

この魚は食べても美味しい魚で、琵琶湖周辺では重要な食用魚となっているが、この釣りにおいては釣り上げた魚は放流することがマナーとされている。この背景にはフナの美味さを知らない人間が増えたこと、また食物に対する切実な欲求がなくなったこと、人間が自ら食物を得ようとする野性を失ったこと等がある。いずれにしても高度にゲーム化さ

第15図 ヨシマキ漁における網のせばめ方の一例



第16図 ヨシマキ漁のツボ



第17図 ヨシマキ漁に用いるマルダマ A-0 型式

れたはずんだ釣りであると言える。このゲーム性故釣った魚を傷付けてはいけないという有り難い配慮から、釣りに用いる鉤にはカエリがないのが普通になっている⁽¹⁶⁾。魚を掛けた時、竿の弾力と糸の張力が釣りあっている時はよいが、このバランスが崩れた時、鉤はいとも簡単にはずれる。一番バランスを崩しやすいのは魚が水から抜き上げられ空中であればいる時である。さらにバラシの原因としてゲーム性の高さでヘラブナという魚が非常に警戒心の強い魚であるということと相まってハリスを非常に細くすることがあげられる。これらの要因から掛かった魚の取り込みの際、よくバラシてしまう。当然のことながら大物を掛けた時この事故は発生しやすい。掛けた魚を確実に手中に納めなければ釣りとは言えない。確実に魚を得るための副漁具がタモ網（抄網）である。ここでタモ網の使用法と形態とのかかわりについて見てみよう。

ヘラブナ釣りは台に腰をおろして釣るのが基本である。大物を掛けても座したままゆうゆうと魚をあしらう。これがカッコイイ釣り方とされている。釣人の位置は水面より高いので、タモ網を入れるポイントは釣人よりかなり前方となる。また、魚を空中に引き抜いては魚がはずれてしまうから、魚の体が半分水面に出た状態で抄う。魚はエラの鰓耙^{オヒハ}で呼吸する。これは水中では効率のよい酸素交換を行なえるが、空中では鰓耙同志がくっつき合い一種の呼吸困難な状態に陥る。そのため口を水面に出し、空気を吸わせると急速におとなしくなるからである。以上のことからタモ網の柄は長い方がよいということになる。しかし長ければ良いというものでもない。竿の長さ、水深等の状況に応じて柄の長さを変えることが望ましい。釣人は複数の竿を継ぐことによりこれに対応している。

さて網枠の形であるが、枠が半分水中に没した状態で、かつタモ網を動かして魚を追うのはカッコワルイとされているので、竿の操作により魚をタモ網の中に導き入れるから枠の形はどんな形でもかまわない。ただ強度と見栄えの面からB-0型式の枠に柄を着けて使う釣人が多い。この釣りの場合、タモ網の形態はゲーム性を背景とした主漁具の機能と釣人のポジションによって大きく規制されることがわかる。

私がかって生まれて始めて尺上の鯉を釣った時、タモ網を持っていなかった。その釣場は足場が高く、取り込む時についミチイトを掴んだ。そのひょうしに糸はブツリ切れ、鯉ははかなしくも消えてしまった。その直後タモ網を買いに走ったことは言うまでもない。

b. アユの友釣りの場合

アユは美味しい魚である。またその美しい姿体と動きも加わり日本人にとってなじみの深い魚となっている。アユの釣法としては友釣りが有名である。友釣りは縄張の中に侵入した他のアユを体当たりして追い払う性質を利用したもので、鉤を着けた罠アユに体当たりを繰り返すうちに鉤に掛かってしまう趣向である。そのため罠に使うアユは元気のよいものほどよく、沢山釣るためにはこまめに罠を換える必要があり、釣ったアユをすぐ罠として使うのが常道である。友釣りに用いる鉤はかつては1本鉤であったが、最近では3～4本の鉤を鏑型に束ねて用いることが多い。この鉤にはいずれもカエリがない。これはヘラブナ釣りに見たゲーム性のためではなく、より少ない力で相手に刺さることを目指す多獲

精神に根差しており、元来專業漁師の漁法であった伝統をうかがわせる。このような特殊な釣りであるがため友釣りにおいてタモ網は欠くべからざる副漁具となっている。友釣りでタモ網を使う主な理由はまず、釣った野アユを確実に、しかも元気に生きたまま取り込むことである。(アユはサケ科の魚特有の強いぬめりを持っており、素手で掴む時注意していないとツルリと逃げてしまうことがままある。かといって強く握ればすぐ弱り次の罠としての使用に耐えなくなってしまう。)次に釣った野アユの中から罠を選ぶ時タモ網の中で行うため。さらに罠の交換もタモ網の中で行った方が安全であることなどがある。

それではこのような要件を満たすための友釣りのタモ網はどのような形態をとっているであろうか。

基本的に釣りは川の中で行動するので、タモ網はすぐ使える状態で身に着けていなければならない。またより多くのポイントを探るためミチイトを竿尻よりかなり長めにとることも加わり掛けたアユは足元まで引き寄せた後タモ網の中に罠と野アユを一緒に落とし込む。そのため柄の長さが20~30cm程のタモを用いる。この際枠の型式に大きな意味はない。

ところが最近「引き抜き」という取り込みの技法が流行している。これは、竿の弾力を利用して掛けた野アユを罠ごと引き抜き空中でキャッチするやり方である。この技法では柄と枠の間に角度をもたせたB・1型式の枠に逆に網を着けた型のタモ網を用いる場合が多い。

この釣りの場合もタモ網の形態は、釣りの技法と漁場環境に規制されていると言える。私はかつてある川で友釣りをしていた時、夢中になって釣っているうち、タモ網を流してしまったことがある。何分初心者のごとく故タモ網などなくても私は釣れる。とたかをくくって釣り続けたが、掛かったアユは全部落すし、罠が弱っても換えられない有様、あせりといらだちをおさえ釣具屋に走ったことは言うまでもない。

c. 磯釣りの場合

磯釣りが一般化したのはスピニングリールが普及した戦後からで、その歴史は新しい。対象となる魚は多く、グレ・チヌ・ヒラマサ・イシダイ・カッポレ・モロコ(琵琶湖のモロコではない)等大型になるものが多い。海面から切り立った岩の上から釣るわけであるからゴボウヌキにしたら太いハリスを使っても切れてしまうし、大型の魚の場合抜き上げが出来ない場合がある。そのためタモ網もしくはギャフを用いるのが常道とされる。

この場合タモ網の形態はまず海面から釣り人までの空間をカバーするものでなければならないから長大な柄を必要とする。さらに対象となる魚の大きさに応じて枠の大きさも換える必要がある。とは言うものの枠自体の形状については、魚を抄うという機能さえ備わっていればどうでもよいと言える。また釣場の磯へ到達するには普通船で渡るか、崖を降りるかいずれかであるから移動に際しては、荷物はよりコンパクトでなければならない。そのため折りたたみ式の枠を用いることも多い。

このように磯釣りの場合もまたタモ網の形態は漁場環境に強く規制されていると言える。

私は不幸にして磯釣りのタモ網を使うような大きな魚を釣ったことがない。

6. ま と め

先にも触れたように抄網は時代性の乏しい用具である。裏を返せば考案された時点で既に完成された形態を持っていたとも言える。この場合「物」から年代を語ることには価値は認められないし、個別に「物」だけをとりあげても物自体については語れるが、それは骨董趣味的な価値観を満足させるものでしかない。「物」は単独で存在するものではなく、「物」をとりまく諸条件と深くかかわり合って存在しているのである。

今回長々と見て来た種々の抄網の使用目的は魚を獲るというただ一点である。しかし、魚といってもその種類は多く、その性質も棲息環境も異なる。魚を獲るという単純そうに見える行為もターゲットに定めた魚の漁場環境を踏まえた方法を考え出さなければならない奥深い行為なのである。

抄網という漁具を例にとれば、その形態は主漁具の場合は漁場環境とそれに根差す漁法に、副漁具の場合は、主漁具の形態、漁法に規制されていることを確認した。抄網それ自体だけ取り上げればそれは民芸骨董、遺物でしかあり得ない。しかしそれは魚を獲る用具として存在し、その形態の隅々にまで魚を獲らんが為の人間の叡知と祈りにも似た思いが込められているのである。ここで取り上げたのは抄網のごく一部でしかない。多種多様の抄網の存在はそれぞれ漁場環境に応じた漁法をあみ出した先人の偉大な文化遺産であると言える。

私は、「物」の中に自然と一体となってその意みを受けて来た人間の知恵を学び取りたいと思う。科学文明の発達には周囲から伝統的漁法、漁具を消し去りつつある。人間を自然の中に位置付け、自然と一体となって生きて来た証拠が失われつつある。科学の力も間違いなく文化であるが、それによって消し去られる文化により親近感を覚える。

注

- (1) いつの時代とは限定しない。とにかくいつも腹をすかせていた時代の人達。
- (2) 石の間に身を潜めるウグイやヨシの根の中に入り込むフナ等はなれば比較的容易に手づかみ出来る。
- (3) 魚網はおおまかに抄網、掩網、刺網、曳網、繰網、旋網、敷網、建網に分類される。
- (4) 農商務省水産局編『日本水産捕採志』(復刻版 岩崎美術社 1983年)
- (5) 同種の形態のものには、捕虫網や鴨猟に用いる網もある。反対にテニスやバトミントンの枠に網を着けたものでも目的は達せられる。
- (6) 注(4)に同じ
- (7) おそらくここにとりあげたもの以外の型式のものも存在するであろう。それらについては私自身の不勉強のため触れることが出来なかったが、今後の資料の蓄積を待ち再考したい。
- (8) 滋賀県教育委員会編『琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書 1～5』(1979～1983)
- (9) この場合のアユは琵琶湖特産のコアユである。

- (10) 能登川町斗西遺跡から検出されたヤナはおそらくこれに近い型式のものであろう。
- (11) 弾力性の乏しい材を用いたB・0、B・1型式の大型の抄網が鮎漁の主漁具として用いられることがある。ただし通常環境ではなく、大增水時、急流をさけ淀みに集まり難を逃れようとしている鮎を陸から抄い獲る際に用いるものである。この時の鮎は淀みの中、上層に集まっているため枠の弾力は必要としない。むしろ流れや、浮遊物（ゴミ）に負けないだけの強さが必要となる。
- (12) この漁で獲られる魚はいわゆるジャコと呼ばれるタナゴ、ハヤ、小ブナ等である。
- (13) 漁具の存在がそのまま漁業の存在を裏付けるものではない。
- (14) この漁で獲れる魚は主にコイ、フナ、ナマズ、ワタカ等である。
- (15) ヨシは貴重品であったためなるべく傷めないように漁をしたが、最小限ツボの部分だけヨシを刈り取り、その中で行動するようにしたという。
- (16) 鉤のカエリが必ずしも必要としないことは種々の研究から明らかになりつつある。

編集後記

年度当初に、これまであまり活発でなかった文化財愛護のための普及啓発事業について、今年度からはより充実したものを計画せよと命ぜられた折り、各種の展示会などの一般向けの事業のほかに、専門知識の普及啓発を兼ねて財団職員の普段の研修の成果を公表できるよう『紀要』の発刊を試みることにした。10名程度の論考を掲載することとしたが、実のところ、あまり原稿が集まらないのではないかと不安であった。しかし、これは取り越し苦労で、希望者を募ったところ即座に10名の申し出があり、職員の隠れた研究意欲を垣間見た次第であった。本年は創刊の年ではありますが、初心を忘れることなく続けたいものと思う。

(普及啓発事業担当)

昭和63年3月 初版
平成4年3月 2刷
平成6年3月 3刷

紀 要 第 1 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781
印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241